

新地質古応力計・マイクロブーディング法：既存の古応力計との比較

The microboudin method as a new palaeopiezometer

木村 希生 [1]; 三宅 智也 [2]; 岡本 敦 [3]; 増田 俊明 [4]

Nozomi Kimura[1]; Tomoya Miyake[2]; Atsushi Okamoto[3]; toshiaki masuda[4]

[1] 産総研・島弧複合地質; [2] 静大・理・地球科学; [3] 東北大、環境; [4] 静大・理・地球科学

[1] AIST; [2] Inst. Geos., Shizuoka Univ.; [3] Tohoku Univ.; [4] Inst. Geosci., Shizuoka Univ.

マイクロブーディング構造という顕微鏡スケールの微細構造から、岩石に生じた古応力を定量化する方法（マイクロブーディング法）を、著者らは近年の研究成果より確立した。

微細構造を用いて岩石に生じた古応力を見積もる方法は、動的再結晶粒径古応力計・転位密度古応力計など、マイクロブーディング法のほかにもいくつかあるが、それぞれの古応力計には適応条件がある。本報告では、各古応力計の特徴を踏まえた上で、マイクロブーディング法をいう新しい古応力計の長所・短所を説明する。

また、複数の古応力計を用いて同試料から古応力の定量化を試みたが、その結果は数十～数百 MPa と大きくバラついた。この解釈についても本報告にて検討する。